園長だより

さゆりっ子

令和６年１０月１１日

Ｎｏ６

文責　若林一成

小学校との“接続”

～子どもの育ちがつながる～

「小学校から教育がスタートする」…私も信学会さゆり幼稚園に勤めるまでは、小学校から教科学習が始まる。教科書が配られ、教科を学ぶための時間割で子どもたちも動くようになる。そんな意識を強く持っていました。しかし、園で「遊びを通して育つ」幼児期の育ちを学ぶことを通して、今までの「小学校から…」の考えでは子ども主体の育ちをきちんと保障できていないと思うようになりました。

そして今までは**「園と小学校との連携」**…園と小学校の教職員が一緒に行うこと。つながること。（交流会、連絡会等）で留まっていましたが、**「園と小学校との接続」**…子どもの育ちがつながること。子どもの小学校への適応（連携）も大事だが、子どもの発達や学びを切れ目なくつなぐ（接続）への転換を図ることも必要であるように思います。

その接続を具体化していく取り組みの一つがお誕生会でのお話会です。

毎月のお誕生会で国が提示している**「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」**を紹介しています。

1	健康な心と体	6	思考力の芽生え
2	自立心	7	自然との関わり・生命尊重
3	協同性	8	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
4	道徳性・規範意識の芽生え	9	言葉による伝え合い
5	社会生活との関わり	10	豊かな感性と表現

その月にドキュメンテーションで紹介する園児はどの姿につながっているのかなと考えて、保護者の皆さんにお話ししています。

例えば、９月はばら組さんの３人を紹介しました。

「３　協同性」に絞り込み、おうちの方には具体的に考えていただけるように

- 互いの思いや考えを共有する。
- 共通の目的の実現に向けて考えたり、工夫したり、協力したりする。

と説明を加えました。おうちの方からは「今まではどちらかというと一人で活動していることが

多かったが、このごろは自分から声を掛けて遊ぶようになってきた。相手のやりたいことを考えている姿も見られるようになってきた。」「自分のことができるようになってきて、自信を持ってどんどん積極的にお友だちにかかわるようになってきている。」とお話しいただき、参加されたおうちの方々と子どもの育ちの一面を共有できる素敵なひとときになりました。このようなつながりを小学校の先生ともつくり、子どもの育ちを真ん中にした**「接続」**になっていけるようにしたいと考えています。

『戸倉小学校１年生との交流会』

１０月４日、年長の子どもたちと戸倉小学校に行ってきました。１年生が音楽会に向けて歌「虹」と合奏の練習をしている様子を見学し、最後には一緒に歌わせてもらいました。そして園からはお礼に呼びかけをプレゼントできました。

以前に高学年の児童が園児のお世話をする体験をメインにした交流を聞きましたが、今回の相手は「１年生」であることに意味があります。小学校に入学して７か月、園で一緒に過ごしてきたお友だち（先輩）が活動している姿と対面し、小学校で頑張っている姿に触れることで様々な思いが園児には届いたことと思います。練習が始まるとその様子を食い入るように見つめていました。一生懸命に歌い、演奏する児童の姿がとっても素敵でした。そして一緒に歌を歌う時、園児たちは自然と手話をつけて、気持ちよさそうに表現してくれていました。園児と１年生の重なり合った歌声が体育館中に響き合っているときは交流会が最高潮に達した時でした。呼びかけで「お兄さん、お姉さん」と呼んでもらえたことが１年生の子どもたちにはとても嬉しかったとのこと。

校長先生からは「靴がきちんとそろえられていて驚きました。」「静かに聞いていてとても立派でした。」「大きな声で、手話もつけて歌っていて素敵でした。」と３つも褒めてもらいました。そして「来てくれてありがとうね。」「待ってるよ～。」と最後まで１年生の声に送られながら帰路につきました。見るものはみんな一回り大きく、難しそうなお話を聞き、次々と出される指示に応じようと頑張っている先輩の姿がしっかりと心の中に残ったこと思います。そしてまだまだ楽しいことがたくさん続く幼稚園での活動にも今まで以上に元気に励んでいってくれることと思います。

ジャイアンツ　４年ぶりのリーグ優勝

最後の最後までハラハラさせられたペナントレースであったが、４年ぶりの優勝。「最高で～す。」優勝インタビューで開口一番に阿部監督が発したが、やっぱり一番似合っているなと思った。現役時代に何度もヒーローインタビューで絶叫していたことを思い出した。そしてインタビューの中で前監督の原さんからジャイアンツを引き継ぐ話になったとき、一瞬声が詰まる場面があった。任された者の大変さがこみあげてきたのか、結果を出せた達成感からなのか。監督としての階段を一歩ずつ確かに上がってくる姿を実感させられた。まだまだ、続きが待っている。